巻頭
インタビュー

生き延びるための「文学」

詩人 伊藤比呂美

［編集部］いじめや不登校をはじめとし、生きづらさに悩む子どもは年々増え続け、先生方は学校で彼らに向き合い、力になろうと日々取り組まれていることと思います。彼らの支えになるのは何なのでしょうか。

日本の「女流詩人ブーム」を第一線で引っ張り、切実な日常を詩にし続けてきた伊藤比呂美さんはその答えを「フィクション」だと言います。教科教育のなかで「文学」のあり方が変わろうとする動きも見えつつある今、子どもたちが文学を学ぶ意味を、詩人の伊藤比呂美さんにうかがいました。

私にとっての文学

――今、詩人・作家として活躍されていますが、やはり子どもの頃からよく本を読まれていたのですか。

6、7歳の頃に『世界少年少女文学全集』を父が与えてくれたのですが、最初はほとんど読みませんでした。当時の全集は、川端康成とか、今では考えられないような文豪が訳していたんですが……父はいらいらしていたんじゃないかしら。8歳を過ぎると夢中で読み尽くすようになったので、成長するのに段階を踏んでいく必要があったのでしょうね。

それから、読み聞かせも大きかったと思います。父は印刷屋で働いていたのですが、ある日、『エルマーのぼうけん』のゲラ（試し刷り）を持って帰ってくれました。だから、私は、日本で一番初めに『エルマーのぼうけん』を読んでもらったんです。父を独占して、全身で声を感じながら、読んでもらった。小さかった私にとって、コミュニケーションをしながら読むことが大切でした。成長して

いくうちに、一人で読んで、本の中の人たちとコミュニケーションをしたり、自分の中にある別の自分とコミュニケーションしたりということが分かってきましたね。

当時買ってもらった全集のなかだとくに『ジャングル・ブック』『家なき子』『十五少年漂流記』などを読んでいました。幼児向けの文学は家に帰って来て終わるようなものが多いけれど、少年少女向けになると、いきなり家から出ることがテーマになるんですよね。話の最後まで家に帰ってこない作品もけっこうある。帰ってくるとしても、子どもたちの心の中では、帰ってこないことを望んでいる気がします。この頃の文学から「外に出る」ことや「道行き※」のあれこれについて、くり返し教わったように思います。

――改めて伊藤比呂美さんにとって文学とは、どのようなものですか。

私にとっては、外に出ることを教えてくれるのが文学。ここじゃないどこかに連れて行ってくれる、自転車みたいなものです。子どもの頃、自転車に乗れるようになるといきなり行動範囲が広がっていきますよね。車を手に入れるともっと遠くに行ける。それよりもっと、もっと、地球の裏までずっと行けるような、大きく、遠くに識までも行けるような、無意連れて行ってくれる存在が文学です。

早稲田大学で教壇に立っていたとき、現代詩は「逸脱」だと教えました。ちょうど、新型コロナウイルスの感染拡大が起きたときのことです。どんどん学生が孤立していきました。「死」について考えている人が多くなり、授業の終わりに、学生が書くリアクションペーパーでも、「死にたい」「消えたい」「誰にも会えず」に孤独」などの反応が増えました。

そんななかで、中原中也の「サーカス」を翻訳する課題を出したら、いろんな翻訳とも言えないような迷訳・超訳が出てきた。「ゆぁーん　ゆよーん　ゆやゆよん」を「Death Death Death」と訳してきたりね。宮澤賢治の詩を筆写する課題を出したとき、身体に書いてきた人、透ける紙に書いて透かして撮影してきた人、そして、自殺しようとして買った便箋に書いてますと書きそえてきた学生もいた。少し背中を押すだけで、こんなに表現できるのかと驚かされました。「生きたい」という声を聴いているような時間です。

夢中になって書いている学生たちと向かい合いながら、詩を書くとは何なんだろうかと改めて考えていました。感情をそのまま書くのではなく、もっと先のこと。感じていても、それに気づいていないことがたくさんあるはずなんです。「書こうと意識していなかった言葉が出てきたら、それが無意識」「そこから推敲を重ねて表現する。それが詩だ」。そう指導しながら、詩を書くとは、自分の無意識を掘り起こす作業だと再発見しました。

だから、授業では「ルールは破るためにある」と黒板に大きく書きました。どれも、枠組みから外に出るという点で、同じことを伝えたかったんだと思います。

子どもたちと生き延びるための文学

――文学作品が国語の教科書から消えつつある流れについてはどうお考えですか。

子どもたちのことを考えると、本当は文学でなくてもいいのかもしれません。でも、フィクションが身近にあることが大切だと思います。フィクションは生き延びる力をもらえるもの、本当にギリギリになったときに、自分をどこかに連れていってくれるものです。そのために、人間はずっとフィクションを考えてきたような気がします。

今、いろいろな手段でフィクションが手に入る時代になりましたが、とはいえ子どもに文学を与えないのは違うんじゃないでしょうか。たくさんの人たちがどれだけ長い間努力して、死にそうになったり、苦しんだりして文学をつくってきたか。文学はそういうものだから、それを軽視するのは何を考えているのだろうと思います。

――「国語」にとどまらず、文学を子どもに教えるにはどうしたらよいのでしょうか。

文学は答えがないものを教えるから、先生たちもやりにくいし、むずかしいものだと思います。だから、「作者はどう思うか」なんて聞くことになってしまう。

アメリカに行ったとき、おもしろいと思ったのは、1冊の本を何週間もかけて、クラスで話し合いながら読んでいく授業です。教科書で一部分を読むだけでなく、1冊読むと、作者のやりたいことが分かってくるんですよね。でも、私が先生をしたときは、そこまでの力はありませんでした。

あとは、中学生のときに教えてもらった矢田先生もすばらしかったですね。私はこの先生に文学的な基礎をつくってもらったと感じています。授業で、エドガー・アラン・ポーの作品を詩から小説まで大量に読みました。1学期間まるまるかけたかもしれません。教科書には小説のごく一部しか載っていなかったのですが、それくらい読むと、ポーという人がどうやって生きたのか、なぜ文学を書いてきたのかということが分かってきます。

ポーが終わって、ほっとしたと思ったら、2学期は古典。矢田先生が古典をいくつも持ってきて、そのなかから私が選んだのは『おくのほそ道』と『蘭学事始』でした。中学校では本来そこまで古文をやらないはずなのに、1冊まるまる読みました。冒頭「月日は百代の過客にして、行きかふ年もまた旅人なり」から強烈で、分からないながらも、ものすごく気になった。今でも忘れられない一節があって、それが「そぞろの神の物につきて心を狂はせ、道祖神の招きにあひて、取るもの手につかず」。そぞろ神（気持ちを浮つかせる神）に遭（あ）った気がしたし、芭蕉の旅に出たい気持ちがものすごく伝わってきたんですよね。まさかその後、そぞろ神にとりつかれて、あちらこちらに放浪をする生き方をするようになるとも、分からない言葉をがむしゃらにつきとめる生き方をするとも思ってもいなかったですけれど。

「外に出ることを教えて
くれるのが文学。
ここじゃないどこかに
連れて行ってくれるもの。」

※伊藤比呂美著書『道行きや』より